長鋪家住宅主屋、内蔵、内門

（１）所 在 地　　笠岡市神島字汁方

（２）所 有 者　　個人

（３）概　　要　　神島北東の高台に位置する旧家。長鋪家は廻船業や塩田の開拓によって栄え、江戸末期より神島で代々庄屋を務めた名家である。敷地は東西に長い形状で、敷地中央からやや西側に寄って東西棟の主屋が建ち、主屋南側の、庭を挟んで一段高い敷地に土蔵を建てる。この庭を東西に分けるように南北棟の内門を建てる。

主屋は平屋建の東西棟で、西寄りは入母屋（いりもや）造本瓦葺で三方に下屋（げや）を付し、東寄りは切妻造桟瓦葺（きりづまづくりさんがわらぶき）とする。江戸末期に建てられたと伝えらえる。大正前期に西側の屋根を茅葺から本瓦葺に、昭和 49（1974）年に東側の屋根を桟瓦葺に改修した。

内蔵は二階建切妻造本瓦葺の東西棟。北側を戸口として庇を付け、窓は二か所開ける。外壁は漆喰塗仕上げで、部分的に海鼠（なまこ）壁を用いている。建築年代は主屋と同時期の江戸末期と推定される。

内門は東面する一間一戸の薬医門（やくいもん）で、切妻造桟瓦葺の南北棟である。控柱は足固貫、腰貫、頭貫で固め、大斗肘木（だいとひじき）で受けた男梁（おうつばり）上に笈形付大瓶束（おいがたつきたいへいづか）で棟木（むなぎ）を支持する。軒は一軒繁垂木（ひとのきしげだるき）、大棟は組棟（くみむね）とする丁寧なつくりの門で旧家の格を示す。建築年代は主屋の座敷改修と同時期の大正前期と推定される。

（４）登録基準

一　国土の歴史的景観に寄与しているもの

笠岡ベイファーム

位置図

（写真）

長鋪家住宅主屋外観

長鋪家住宅主屋内部　床構え

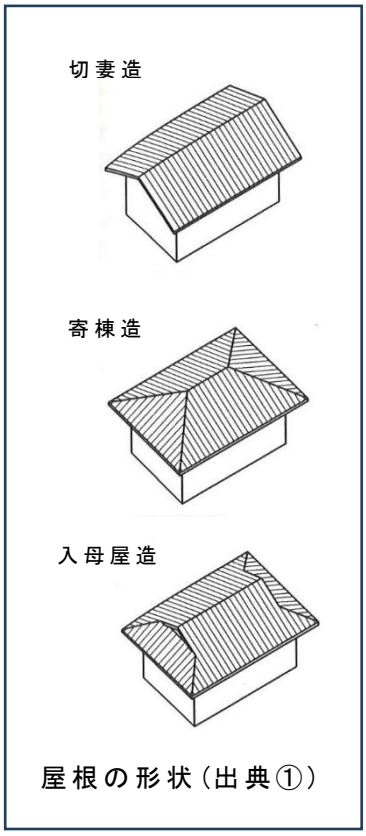
長鋪家住宅内蔵外観

長鋪家住宅内門外観

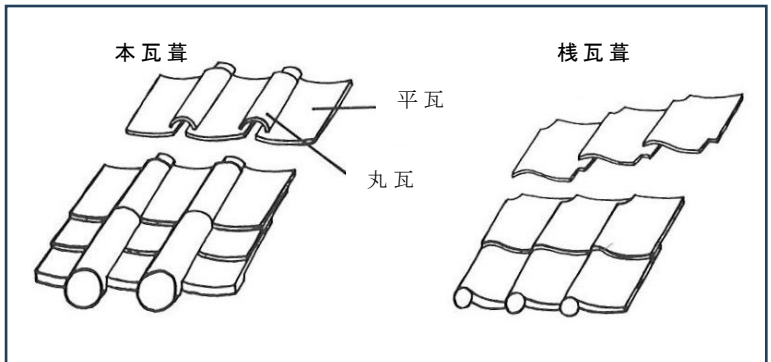
長鋪家住宅内門側面　妻側

【用語解説】

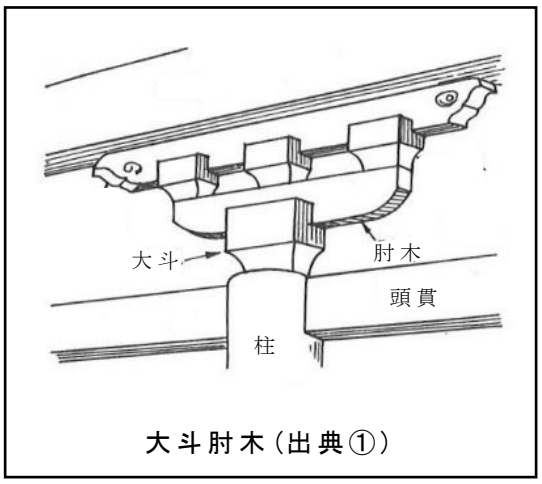
- 切妻造（きりづまづくり）：棟から両方に葺き下ろした、二つの面からなる屋根、あるいはその形の屋根をもった建物。
- 寄棟造（よせむねづくり）：四方に流れる屋根のうち棟を持つもの。
- 入母屋造（いりもやづくり）：寄棟造の屋根上部に切妻（きりづま）の小屋根を合わせたような形状の屋根の造り。
- 本瓦葺（ほんかわらぶき）：平瓦と丸瓦を交互に用いて葺いた屋根。
- 桟瓦葺（さんがわらぶき）：横断面波形の瓦で葺いた屋根。
- 下屋（げや）：本屋の外壁に接して設けられた片流れの屋根、またはその下の空間。
- 海鼠壁（なまこかべ）：土蔵造りの建物外壁仕上げ方法の一つ。方形の平瓦を並べて釘止めし、目地に漆喰を断面海鼠形＝半円形に盛り上げたもの。
- 薬医門（やくいもん）：中世に武家又は公家の屋敷などに現れた門形式の一つ、後に城郭や社寺、さらには民家にも使われるようになった。
- 貫（ぬき）：柱同士をつなぐ横木で、場所・用途によって足固貫、腰貫、頭貫などと呼ばれる。
- 大斗肘木（だいとひじき）：肘木とは上部の荷重を受ける横木で、形状や使用箇所によってさまざまに呼ばれる。
- 笈形付大瓶束（おいがたつきたいへいづか）：妻に使われ棟木を支える円形の束で、形状が下



屋根の形状（出典①）

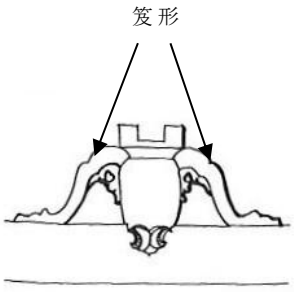


瓦の葺き方（出典②）



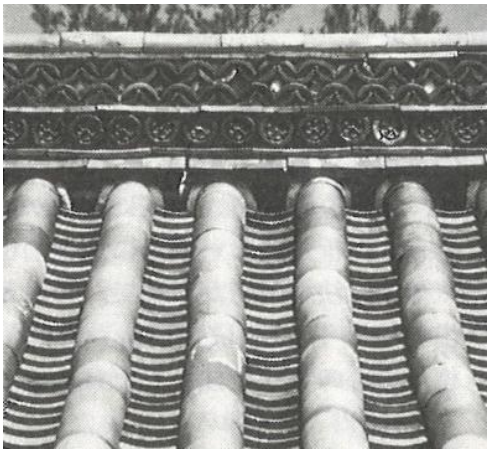
大斗肘木（出典①）

方ほど細くなり、瓶子に似ているので、この名が付いた。両脇に装飾として笈形と呼ばれる彫刻を付けたもの。

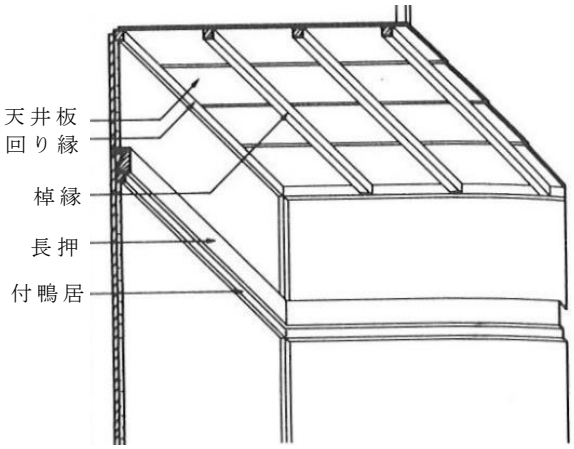


笈形付大瓶束（出典③）

- 男梁（おうつばり）：門柱上部の桁行に２重の梁（横木）が出ているときに、上に位置するものを男梁、下にあるものを女梁（めばり）と呼ぶ。
- 繁垂木（しげだるき）：密に並べた垂木。
- 組棟（くみむね）：青海波、輪違いなど棟込み瓦を棟の上下の間に組み込んだのこと。
- 棹縁天井（さおぶちてんじょう）：棹縁と呼ばれる細い材の上に張った天井。



組棟（出典③）



格天井（出典①）

出典①　小林一元・高橋昌巳・宮越喜彦・宮坂公啓編著 1997 『木造建築用語辞典』　井上書院

出典②　文化庁歴史的建造物調査研究会編著 1994 『建物の見方・調べ方　江戸時代の寺院と神社』きょうせい

出典③　武井豊治著 1994 『古建築辞典』　理工学舎

出典④　彰国社編 1993 『建築大辞典第２版』　彰国社